

Title	癌雑感
Author(s)	中野, 陽典
Citation	癌と人. 20 P.9-P.10
Issue Date	1993-03-31
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/23961
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

癌 雑 感

中 野 陽 典*

もう癌を研究的に取り扱う大学の生活から離れて10年がたってしまった。今は、一般病院で種々雑多な疾患を診療し、その中で癌も診ている。研究的な目的をもって診ているときは、むしろ癌のある分類の中に組込もうとし癌はかくかくしかじかであり、こうすればよりよく治癒せしめうるのだという一般論を見出そうと努力していたと思う。しかし今は癌は1つ1つ、癌患者は1人1人が異なるものであるという立場をどうしてもとりたくなってしまった。1つ1つ、1人1人の研究に移ったと思っているのである。

薬剤に対する反応も、また癌自体の生育の仕方でも1つ1つ異なるし、宿主といわれる癌患者もまた1人1人癌に対して異なる反応を示すことを強く感ずるようになってきている。もっとも研究的に癌を取り扱っていた頃にも、乳癌の補助化学療法(術後の薬物療法)の結果をまとめていて思った。Stage 1の早期乳癌でも、わずかではあるが補助化学療法の有無にかかわらず再発したし、Stage 3の進行癌でもかなりのパーセンテージで無再発者がいた。結果の報告としてはStageの早いものはより再発が少いと一般論としては言えるということであった。しかし気持としては、何故Stage 1でも再発するのか、何故進行癌でも再発しないものがあるのか、その原因を究明したいと思っていた。1つ1つ、1人1人違っているのだと思ったことは今と変わらない。

2人の胃癌患者がいた。いずれも80才に近い方で男性と女性であったが、それぞれ殆んど時

を同じくして胃癌が見つかった。腹痛や食事がとれなくて検査を受け診断されたのだった。お2人共、中等度の進行癌であった。胃の内視鏡検査にて組織学的に癌と確定診断が下され、勿論主治医は手術をすすめた。高令だが、今の医学的水準では充分手術可能であったのだが、お2人共心臓がわるく、家族の方は手術を承諾されなかった。診断を下したのものにとっては残念であったが薬物治療のみが行われた。しばらくして2人共体調を回復されていった。経過を追って内視鏡の検査が行われたが、1人はずいぶん癌が縮小し、最初のものとは似ても似つかぬ状態になっていたが、癌は依然として存在していた。クスリが効いていることは医者からみて明らかであった。もう1人は、殆ど癌の状態は不変だったが悪化はしておらず、体調だけはよくなっていた。短期的には、こういうこともよくあることなので、さして不思議とも思わなかった。

えんえんとクスリをのみながら、やがて1年がたち2年たち3年がたった。やはりお2人共健在で、クスリを貰いに病院に通ってこられた。検査も時々行われ、その度ごとに2人共癌と共存しておられることが証明されていた。しかし高令者としての日常生活には何ら支障なく大いに楽しまれていた。

やがて5年たったが、やはり癌と共存のままであった。ここまできると治療している側も、これはめずらしい症例だと思い学術的に報告しようとして、いろいろ文献をしらべてみると結

* 長堀病院長

構進行癌が薬物的に完全寛解した例や、時には、そのまま再発していない例が報告されていた。これらの例は薬物の効果のあったものが大部分であったが、中には宿主の生き方の変化が好結果をおよぼしたという考察もあった。私共の症例は癌と共存していたが、いつみても決して癌は消失していなかった。

それからまた3年がたったが、お2人は、まだ元気であった。しかしながらやはり癌は癌であった。発見から9年たってとうとう1人は癌の発育のためになくなってしまわれた。もう1人は脳梗塞で倒れられたが、何とか今も健在であり癌もまた健在である。

癌と言えば、一様に死を連想する恐ろしい病気として、とらえられているし、またそれは外科的に切りとられなければ、大部分まさしく早い機会に致死的となっていくのが一応の常識である。しかし今述べたお2人のような例は、胃癌以外の他の癌でも経験する。特に乳癌などでは、クスリが比較的良く効く癌で、再発後の薬物による完全寛解例をしばしば経験する。症例によって全く進行の過程が、異なることは一体

何を意味するのか。癌が違うのか、宿主が違うのか、治療法の差か、これらの原因は、学問的にまだ、はっきりと解明できないし、ことが、そうになっていくことを、あらかじめ完全に予測することもままならないのである。だからこそ、進行癌であっても1つ1つ違う、1人1人違うのだと考えて治療はあきらめない。不思議なのか、当然なのかわからぬ経験が積み重なって治療へと導いてくれる。そしてまた予期せぬ結果が生じてくる。

今日も、1つ1つ、1人1人違うんだと思いつながら、どうすれば、これらが1つの結論にまとめられるのか、予測できるのか、考えている。経験が研究の手段である今は、解明の手がかりすら得られずに、ただただ、事実という神秘に感嘆しているのみである。

癌遺伝子をはじめ、めざましい癌研究の進歩は、やがてこれらの疑問を解決すると思うが、それはこの大きな自然の神秘の中に組込まれたあらゆる現象と関連をもったドラマであるに違いない。

